繪本自来也説話

後編

壹

へ 遠3
1910
7

報仇奇談 自来也説話後編叙

善游者ハ溺善乗者ハ落と人の道を不
行ざ勇力武も却て其身戕ふ局とてひのしべ
悪名を世ニ傳ふ此書也尾形周馬寛行
異名自来也半点ハ義ニ依り猛ニ勇那ニ人

たゞ乃道に背ける賊徒の行状終に身をころし汚名を后面に残すや狂人乃真似とて大路を走らバ即狂人なり悪人のまねとて人を殺さバ即悪人也詐ても賢を學バ賢也以這前後十巻の書自来也の悪行を綴り説話と做ハ中にも義に似て不義の事あれハ童儂意

我停て閲し善乃不善勇の仁を労を無へ侍しバ乃勧善懲悪に一助ならめと書肆の需に應してなを後編五巻を梓に行ふこと爾り

文化丁卯春正月

感和亭
鬼武誌

南岳画

自來也說話後編巻之二序

代々衣
吾川宋男
破魔之助妹汀

妙香山之異人
万里野破魔之助

二

自来也説話後編目次

第一巻

○自来也夢中遇異人 併 於妙香山為蟒蛇退治条

○自来也誑甘楽屋球右衛門 併 奇術奪大金条

○万里野破魔之助於金亀山得石螺 併 妹汀于吾川采男戀慕条

第二巻

○勇侶吉郎正運捜自来也行衛 併 自来也権為海賊条

○勇侶吉郎於鹿嶋沖逢難風 併 自来也刧貫船而于侶吉郎為對面条

○後嶋金吾救吾川采男 併 金吾女児贖身而祐吾川条

○朝妻歌之助到丁大議曲輪 併 侶吉郎与歌之助娼妓買論条

第三巻

○自来也再度到安房國并上総國百首邑近江屋
茂八家挨入条
○千歳屋代々衣愛押并押亡身報恩条
○猨嶋金吾逢難并吾川枀男救金吾条
○吾川枀男到大礒并小厮得助計刧而両個之
結縁条
○於上総國破魔之助妹汀戀病而死并汀亡霊
娼妓代々衣喰殺条

第四巻

○勇侶吉郎到相模國温泉場并不圖入仙境条
○吾川枀男逢難并万里野破魔之助妻環救
枀男条
○仁木溜遠与石堂晴張結因并自来也鏖仁木
家人而奪贈物条

第五巻

○石堂家之息女玉琴奇病 併 自来也于石堂家入込条
自来也取期 併 自来石由来条
○荒山隈五郎時綱捕賊徒 併 勇侶吉郎天眼坊等
自来也之吊後条
以上目次畢

親仇奇談 自來也説話後編巻之一

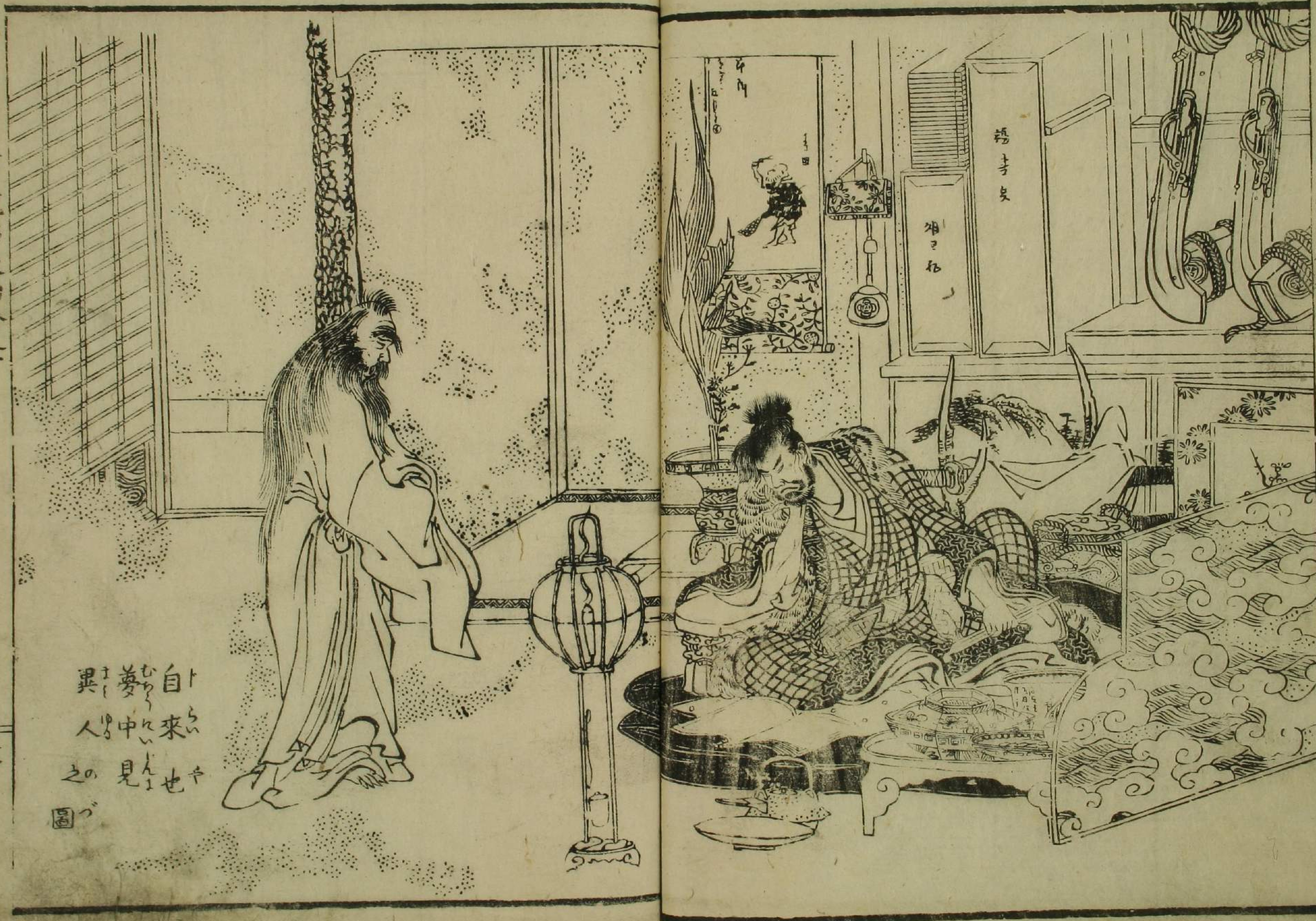
武江 感和亭鬼武著

○自来也夢中遇異人 併 於妙香山為蟒蛇退治条

舍己而教人者逆正己而化人者順逆者乱之招順者治之要なりとかや去程に星霜押移延徳年中足利十代義植公の治世なりし頃三好家の浪士尾形周馬寛行異名自来也ハ安房国鏡浦にて勇侶吉郎正運の祖父父母の仇討を見届其場より立別を権く相撲国鎌倉の辺とある暗に徘徊做世の光景を窺ひけるをり一夜熟寝る枕辺に一個の異人立現れ身体労せるさまもなく古気ある声音を擡いへらく汝周馬寛行過し頃越後国妙香山にて相見一術を授し事ありしが

覺ありや今危急に逼りて憑られし一条あれば茲迄特く来りつるなり起よ覚よ目ざよ自来也と呼る声の森耳に入り自来也眼を睜開仰看て大に驚き忽起立拜伏做し這者何許なる大人の光臨如何なる動静の仰かや一術なりとも授玉ひし師の大恩ちど亡却を做んべしぞ依憑乃次序不意置説話あるべし某身に應懲せん術は別らんとありければ異人怡悦の顔ばせゆるく汝も年来霧を含露を呑異術を学び妙香山にありて身を艱ふ所に豈不計や汝も住る信濃なる黒姫山の岩間の岩屈に蟠りし蛇近来国續なれば妙香山に到なきを悩見累なりといへども蛇に逢ふて子ら術行ふ事不能さりなる牧年の功ある子なれば容易楽がた免に一命はのがれ不果共いま

十日を過なば術も老那蛇のために命をも失んと謝ん這迹是非なしとの想ひつよど悪徒形がる子なる一術を授し汝なれば子は此侯に亡ぼさも残軟奇術を譲らんされ汝が勇猛武術をもって那蝦蟆を退治んやなるあるとれは子が得し術は汝に授らんと一念此に象ある べし身の一大事を憑るなり今那蛇と子と妙香山中に争ひあれば一刻も老早那蛇に到り子を救ひ得させよと語をはるく自来也は師の一大事とある上は我一命は失ふとも遅に那蛇へ走むかり力を合せ申んと諾言の中より異人の容象消失て残る国の燈の消なんとして明を遮悪寒く身に染風あると始而に覚る自来也は心附て前後を見廻し僧は啻今の異人の到りて我を憑と覚しも夢中にてありけるよ

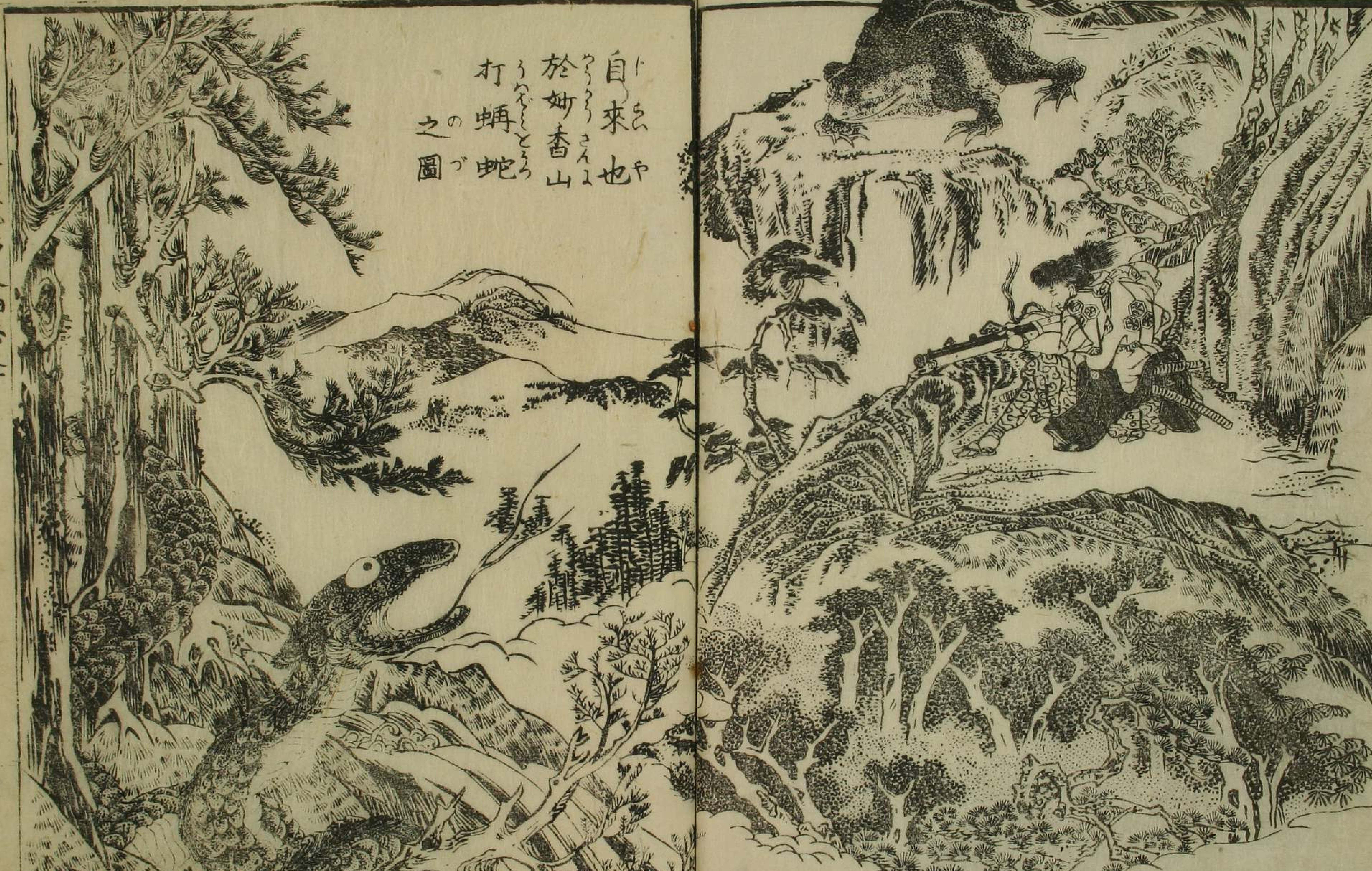

自来也夢中見異人之図

さハあれ正しく異人の告なり夢幻にもあらバあれ假にも一回師弟の約を做しゝ異人身の一大事とゆるかせに捨がたき今の義と知れかくすれ越後の国妙香山に分衝寶を紛し来らんと夫より客路の難ありし小嘍嘍四五輩を従へ暗に鳥銃二三挺を菰に包く取拿せ妙香山へと志し夜を日に継でど急ける抑越後国妙香山といふを頸城の郡高田の脊後にありて山根ハ信濃の国境に近く麓より絶頂迄も数十町を登り草木生茂りて岩壁峨々たる絶巘あり尾形周馬寛行ハ異人の告に路を走不日して妙香山に到て山深く茅押分躋攀登れ暗山中を其所よ実よと見巡る処に遥の峯杉木の間よりひと腥風颯と吹来り雲霧覆ひし岩上に掛渡五六

すもあるべう覚る焔の如き物明晃と光り耀くまで峯に満く自来也於是這を観るにあれバ焔と見へしハ眼にて象ハ角ある牛の如く真黒なる物の蹲谷底を瞧居るさまなれバ自来也不審怪物哉と想ながら心をつけてよく岩間を看下せバ岩石聳耳苔清水滴る岩屈より数百年経し松の古木ほどなる馬に等き頭を出同じく日月のごとき眼の光赫として半点揺めく光景を山上より能看れバ是なん数十丈もあるらめと覚しき蟒蛇なるが岩上にありるゝハ大なる蟇なるぞひかりぬる也へ自来也に従ひの小袱どもハ攦振慄自来也の袖をひかへ斯る懼所に到りなバ柴筝がた処に命を果ん老早林麓にかり玉へと色を失ひ勧まれバ自来也暗にいへらく兼而

異人の憑ける蛇の雛なり是なりん予ハ此処にありて動静を窺ひ跡よ
り麓にお至るべし汝等ハ先に麓へ下り予がいふを待べしと小嘍啝
に命せし鳥銃の中十匁玉の大筒を携て小嘍啝ホどろき凡
百有余間を隔たる峯の此方なる岩間の松を小楯となり鉄炮
に玉を込火縄をつけて携く頓て蟇と蛇の斜眼逢ふ動静を窺
ひ居たりける古ノ希に蟒蛇ハ勢ひ強く紅の舌を出し辟静と岩上
を見擡岩屈を扒出まで上なる蟇も火炎を吹かし遮を防ぐ体
なれども甚しひに労て光景なれば自ら衰也熟く考るに異人乃
蛇を恐怖ハ應しく蝦蟇の術を以て上なる蟇ハ異人なりて疾術
未なく蝦蟇の体を顕せの我何なるもせよ那蟒蛇を仕留ばやれん

と大筒を取直し光輝眼ば目當に筒先けりに顱着寄火蓋を
切ま六不堡言蛇の頭を迷と打と覚しがもされて蛇ハ弱も中しまで
蟇を含置直筒音の方へ向つて大口明扒擡るを手疾に玉を込替
て打出鳥銃蟒蛇の咽の中へ打込られしめの蛇も十匁の鉄玉を
口中にうちこみまま狂ひ猛く谷底へ転び落るとミへけるが山鳴震動地
響倣し峨々たる岩壁崩も嶽雲雾寝ひ朦々朧々として瞳朦
大木を吹倒しさも凄き光景なり自ら未曾不透鉄玉を込替へ打
狙に遂に左計の蟒蛇なれども吼らみぬて沼田打狂ひ死しる動静
とミへたれば半点雲霧晴に於も岩上を観擡なば蟇の象ハ消
失て以前の異人忽然と合掌倣し労を果る光景にて自ら未也


自來也於妙香山打蟒蛇之圖

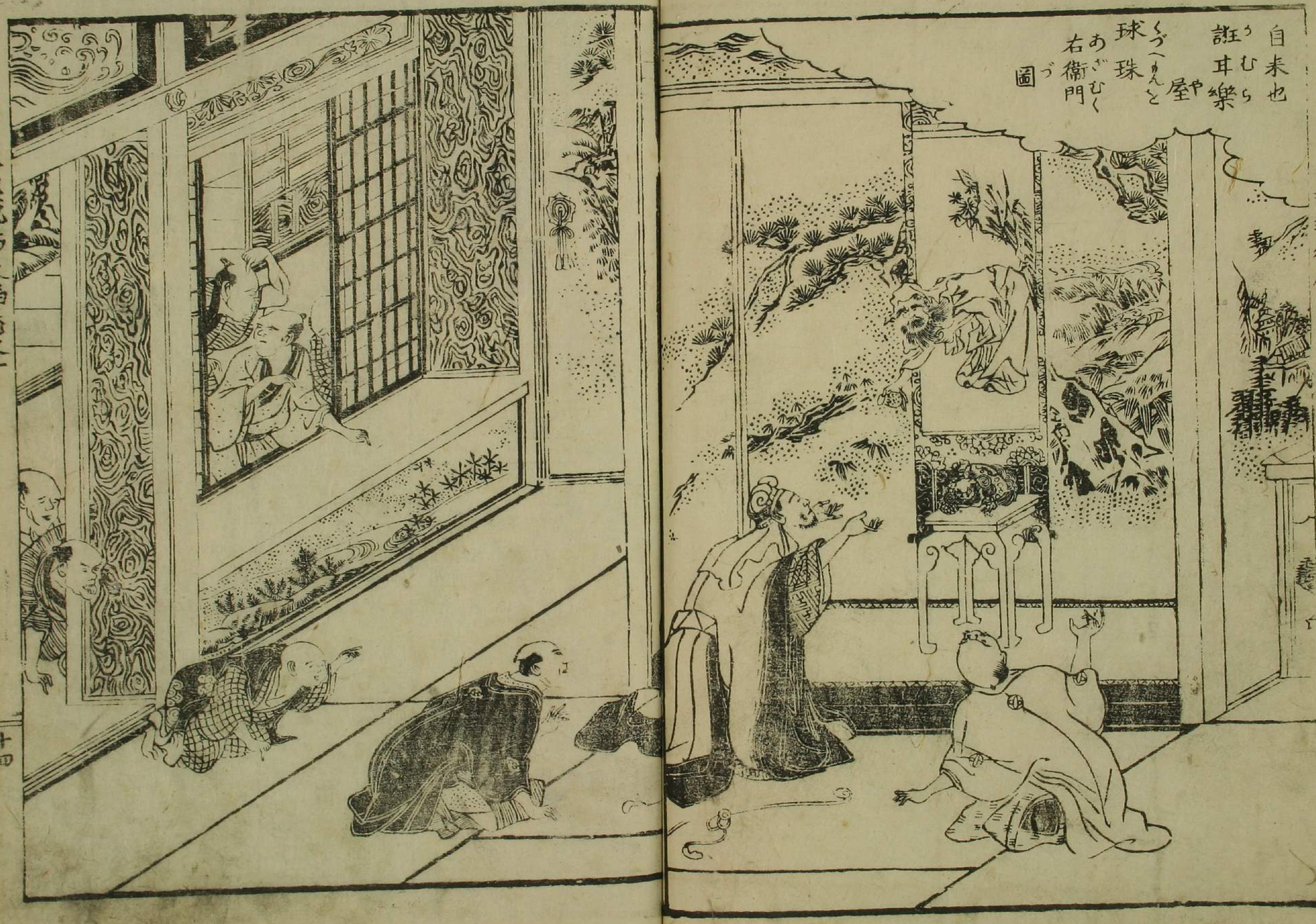
を招き近跟莟気なる息を継自来也に向てかくぞ予が憑をす
ハ大蛇を退治なしたる汝が勇猛急難を救得させし欣躍さとく
まりながら汝祖枚日梁と争ひありねども身躰労れ今ハ中く一命を
保こと難し因茲約せしごとく予が得し術ハ残なく曽今汝に授なり
ぞと一巻を取出し自来也に与ふ這者難有と一巻を押戴
を遠く尋ぬ意に收て自来也ハ美人を鉾しく后やうく師弟と
なせしも不思義の因縁此上ハ這山中に某も足を停師の行末を
香届んとありけれバ美人頭を打振否とよ予ハ疾此侭に命終まで
ハ茲地にありて益なし彼汝が行状盗賊の首領なる悪行あ
れども今更可賜ん底にあらざれバ這を止るとも聞入まじ併義氣
ある汝が嗟なれハ縦令他手に不死共遂あハるゝ期至らん必終を
慎て傳ぬる術の奇特を蔵し名ハ後代に残べしとありて一の声
あるとも出水が消て曽一陣の煙となりて立上ぬ自来也奇異
の想ひをなし泪を流しして凌伏拝意僻静に麓にわり立に
嘍㘓を集て里人に志せ那蟒蝎を打殺せし場所へ伴ひ是
を見るに凡其丈十余丈囲四斗樽の如く惣身鱗生て頭ハ馬
に等しく妻しき蟒蛇なりけれバ衆皆舌を巻嚇怕自来也の
勇猛を感歎し里人饗應し傳甚名を尋しかども曽武者
修行の浪士と而已答て辞別なし此所をぞ立出ける
○自来也誑其樂屋球珠右衛門 併 奇術奪集大金条

上野国碓氷郡下仁田てふ辺りに其汁屋球珠右衛門といへるものゝ金銀田畑多く持家族上下数百人の暮して近国に名高大巨富と呼べしが一日年の頃四十有余なる道人とも可謂べき有髪の僧躰柔和の容貌なるが頭に綸巾の如き物を頂き身に麻の衣を着し手に藜の杖を突従者五六輩を延連忽然と球珠右衛門の家に到りいと殊勝なる音声にていへらく予は客路経歴の優婆塞なるが此に来るは爰家に面会なすべき知音あらく尋ねまゐりぬ其人何所にありや案内玉はれかしとあるに変にありける者共位なる知識とも観えしかば懇に款待相見玉はんといふる人は何といへるものに候ふやと尋ねければ那道人答ていへらく其名不及言予相見なば判

なん原来疑ひのなくば間毎に案内あれと悠然たる僧位に恐怖主人球珠右衛門立出行ばとまれ先此方へ入せ玉へと奥深く伴ひ中の間に仙人と覚しく木の葉の衣を着たる異人の手に一の華を携へたる画像の一軸床に掛てありけるが那道人這を看て主人を延停め予が尋る人此にありと一軸の画像に向てそらく尊大人如何絶て相見不做故に此従累年在処を捜し求漸くにして今日巡遇事予が福何か不如茲大人不知哉当年諸国難病流行做し多く人を傷と欲は是を救得させんとあらば大人の秘蔵せる一葉あらでは病苦を除ん事難し因茲其名葉を権しの中予に借玉へ此難を避んと予に憑者あらば祐得させん

此事大人に相見の上説給はんと特々来りしなりとありければ
恠我床に掛る画像の僊人まゝ點丸拘へ拿る一の壺を差出
せしが此方の道人是を接此一茶ある上は許多の人の一命を救ん
事亭が大幸大人の仁恵に依る処ぞと頭を低て禮拝し儼然こ
と表の方へ立出るにぞ主人殊殊なる先刻より奇異の事に想
ひ傍に動静を看詰ありけるが那壺を携へ道人は立帰さるなれば
忙慌衣の袖に取携て拝伏しつゝ推く扣へ玉ふべし當今の右
枝有葉なり給ふが當年難あつて許多の人を傷との命ある
ゟにそる大人這を救ひ玉んとの事なるは僕が家族凡百有余人あり
此者ともの一命もそる人の神術を以て救ひ一家の病難を免まじと志さん

是へとありければ道人微咲てさらば世原来家富るといへども身に
替ても金銀を惜のみあるも此茶調合徴し他を救わんまの許多乃
金あらざれば外調合の茶不足故にこれより富家廉直の人を
尋黄金を調達なし其一家は素世上の人を救んと欲するなれ
ど不便なれども今汝一家を救ふ事不能と荅へ袖を拂つて立んぞ
んとせるを殊殊なる尚も推留僕不益の事に金銀を費させてことさ
慎侍れど斯る一大事をうけ玉り一命に換る寶やあらん且多乃
人の命も救ふとあれば我身に無ぜん様は金銀出し人命を救ふ
の粘と徴し申さんまく尊人只顧憐を垂玉へと低頭平身しつゝ
懇ごきぶ道人のいふやく左計の心底あらば救ひ得さセん二歌舞


自来也
誑耳楽屋
球珠と
あざむく
右衛門
図

金とても今三千金を出しなば渠一家を始許多の人命をもすくひ
得させんとなる時は這陰徳汝が身に報ひ倍家富繁栄なるべし
さぞと聞より主人大いに悦び速に一千金を取出し道人の前に差
置バ道人ハ延連たる従者を呼よせて這を箱に収拾前に拿帰
らせて後主人に迎ひていはく来る八月十五夜ハ殊に雲晴清ぬ
なる月夜なれバ此夜渾家を清浄に徹し所々に火を点じ衣服
を改め香を焼手を待べし其夜亥の上刻茶を携へ此家に到
至なるべし夢と疑ふの事なれと尓し畢て立出ると見へけるが那
道人の影象甚だ不看成ぬれど殊珠太衆つて道人の後を禮拝
し備其日を待るに程なく時去月来て今日ぞ八月十五夜に成

されバ早天より起立渾家を清浄暮に及べバ四下に燭を照し香を
焼衣服を改め時刻今やと俟ほどに疾戌の刻とも覚し比頃より
空掻曇雨雲覆ひきたり月明光を失ひ卒に雲霧陰出し亥
の刻頃ハ倍猛く這者異人の言に差ふハ如何と主人始渾家の者
共不審想ふ処に其夜ハ暁近雨降て道人の到れる気もなく
夫より幾日を過れども何の沙汰もなかりければ殊に渾家ハ
案に相違して始て誑されしことをさとりつきしがさるにても一軸の
奇特こそ怪けれと那掛物を取出し観てあれバ原来ありし容象
に替らで仙人の画を携へたる画像の上に自来也と記しあり
されバ伝へ聞なる盗賊自来也の所為なるべきと聊疑ひ不晴而已

なく遂に二千両の金を奪ひとらましありこれ自来也妙香山
にて異人の奇術を信継越後より鎌倉へ立帰る過往球珠なる
の巨富なることをきゝ及し術を揮ひて斯る奇術を行ひなす
くれ金を哄嗡一取るまでありけるかとかや

○万里野破魔之助於金亀山得石螺　併　妹汀手音川宋男意纂条

相州江島郡金亀山辨財天ハ諸人歩行を運び諸願を誓ふ所なり
一入に厳を増し尊く順ハ島山にて四下に海原を眺望し奥の院
ハ海辺の岩屈に安置勧請做し奉つる絶景の地霊験とよにあるさ
まる宮居なくぞ座しける此に石堂晴眠の近臣万里野破魔之助
保義といへるもの名し頃日本武者修行の心願ありて発足の剣

這に術願を以ぎあゝ由る諸国を徧巡り今無恙鎌倉扇谷
の館に立帰りしも是身ぞ辨天の加護ありとて妹汀といへるいさ
破瓜の女児一同供人延連此宮居に詣んと歩行路をとひろへ浦石
肩由比ヶ濱辺を漂はく海面の景色を破魔之助も眺望予武
術修行の頃ハ寒風霜雪も厭ひあく所に伏し山に寝しなど
武を磨れ一条にふあれバ絶景の地も意不跟ありつるが斯く
我住所に立帰ん静き浦辺ハ格別の観所あると賞美なし

目の届く沖残霞や帆りけ松

ちど口ずさみ歩行うち妹汀ハ侍女あるとも外珍しく濱辺の貝
を拾ひ取路不果放行バ破魔之助絶余他を辟静に後より来より

汀於由比濱(みぎはゆひがはまにおいて)
吾川宋男(わがはうねを)
意暮(れんぼ)之圖(のづ)

玉へ是ハ別當方ゟ所用もあれバ半刻先ゟまゐらんと濱辺傳ひに
行まぞ婢女共ハたゞ欣悦気詰の兄君先に由くせ玉へバ心置なく
貝をも拾ひ欝気も晴しゆらんと汀ゟ勸も路の程も不果放行
あちこち処ゟ同じ藩中ゟ晴眠の扈従勤る吾川采男とゆふある
鎌倉一の美男と聞えし若冠成しがこれも今日江島辯財天へ
参詣せんと鎌倉の衙より金亀山へと志し七里が濱ゟさしかゝく
此男卑賤の婢女ども采男を看るより低言合昨夜燈花報あ
り今朝喜鵲の噪ありつる漢子をみるまゝせら女児ゟも尊説
あれ這社藩中ゟ名高吾川采男殿と歓噪嗲ゝ也ど汀ハ流石
ゟ面慚かざし扇の花ゟ太春也が覩暫す吾川采男万里野の妹

と知てはいれど茲近言も不替てしが汀の艶なる容貌ゟ権く見
惚く立停何故寄縁なりと同じく拾ふ濱貝ハ恋の榜侍女共
僻静傍へ近寄く卒尓ながら此方ゟも先程より拾ひ得し種く
の色貝多ゆれバ君の拾はせ玉ふ貝の中稀なる貝もまじらバ
此方の貝と替換ゟ做玉ひしとありけれバ采男も僥倖ひと想ひい
と安き事ゟこそまぐれ帝呂今拾ひし此貝ハ倍ゟ子安貝とて称へ
婦人の安産の守とも成ゆゑよしそれの女児もいかで必定るはずも
まべらやや産ハ女の大吉と聞ハ這を社まゐらせんと指出せぞ女児汀
も老早よゟ采男に心迷ひつる男こそ夫とも定めまほしく想ふ折
からちつ也の面慚ながら手より手へ那子安貝援く君より賜はる

此貝の肌身に添て守と做し仔細しきり知るものありつる
とも時不定募鳥なる産の紐解んと顔赤く恥らへる言の尾
まつを采男のなくらく甚麗れ容象を延人数多の花嫁児とやが
て自から然れ婚礼梢の花ハ霧く手折もならぬ見外の花嗇
莫くこそまづれと詞に含意の謎解る汀も嬉気にみぐる不束なる
身をや維なる倚ふ水あるやと互ひに想ひ思ふく動静ハ見外に婢女
ども君も江の島詣なぐにまでるが福の几路連倶く歩行路を一連
に別当方迄おひろいと夫と悟りし粋の尾濱の砂路打連く金亀
山とさして行さりや万里肚破六之助保義を妹汀の来るも待をさ
く一個江の島に到りし弁才天を礼拝做し後海辺にわりく窟に詣

く主家と其身の武運を祈り稍有らく前後を看れどもいまだ
妹も不到ば宿坊にて待あらんと立帰んと做ㇾ所に窟の中より
声ありて保義〳〵と二声三声微妙の音聲聞ゆるに破六之助ハ哀れ
やんとえ廻せども邊に人もあらざれバ不審何ならんと言つまろく
窟より汝に授る一品あり破六之助前面に来れとありけれ侭に窟の中
を半面ばかり位高き上臈の玉の冠錦の直垂粧ひ美〳〵しく艶なる
る女性立現ひ光明赫〳〵として立せ玉ふぞ這也如何なる事
なるらんと仔細やと問へまゐらすれバ我ハ汝が声にて汝平日予を信
仰做し主家の武運を祈りん正しく忠義篤實の士なるをもつて
今此窟に埋もある一の名器を授んと呼停まづりしなり予が立

下を穿ちよ石櫃のあるべし其中に一の石螺ひそあれバ這を取得て立帰り永く汝が家の重宝となすべしとありし茲石螺の奇特といつぱ一回這を吹鳴す時ハ其音数十里に響き悪魔夭邪を追退障碍を拂ふ名器なりと示し畢て光明放忽然と失玉へハ保義感懐肝に銘じ其後三度禮拜し力を揮て巌を刎退刀の鞘以土をうがてバ一程の白気立上るとミへたるが神女の告に半点不差一の石櫃堀出し中を開む尺計の石螺あり彼ハ大に悦これを取上押頂石櫃ハ元の如く小納め亟懐中なしたる包袱まて那石螺残骸与包這を携へ岩屈より立出る折柄此宿坊に丹弥といへる十五六歳の児のありたるが原来織んあるものにや宍前より窟を覗破て助

の動静を窺ひ今兄得たる石螺を累に好しく何卒奪んとせんと思ふにや不歓も洞口に待居不知何んあくも立出る彼を助此手に提拿られ石螺乃包を急に奪ひ山手の方へ逃出せしを這者狼藉奴推参なりと小冠者ながらと跳掛つて捕へ押へ包挑とり怒りの余り片手に児を延掴岩上より眼の下なる海の深みへ打込バ丹弥ハ二三度浮つ沉つ潮水食て其侭に底の藻屑と消失し所ハ今も名に残る児が淵とぞ云傳ふ
此頃於一笑支ありし金亀山の僧某那児と元道の好身あまつりしあへるに丹弥那僧にかゝる貞操ありて海底に沉死せしと后くへくの言過かるを那僧聞之て哀至に想ひ俱に其淵に

破魔之助
金亀山に得
石螺圖

身を投し死なんと海辺に到りしが流石に命ハ惜やありけん
ゆるともに身をなげきぞとおもへども
むかふの岩であるまいかなし
漸く徐まてゝ其場より何地へ退きしや其行方知れざりし
とかん實抱腹一話にてぞありける

閑話休題破六助の妹はあやめ川采男諸共に江の島に到りて
宮居に詣でしが此所も那所も破六助を尋ぬれども不遇ば侍女とも
倖ひの事に想ひ兄君ハ宿坊に坐せらん那所も気詰り小侍
ん也し海辺の茶店に憩しき待合せ玉へと否む采男も延連く瀧鼻
屋といふ茶店の大坐を借り酒肴を調へ采男を歎待透を見合婢女
ども媒なして遂に采男は付の中を執持此楼上に二個仮寝の枕をならし
比翼のかたらひなしけるとぞさる程に此日此邊に半点侠客と呼るゝ
鶉の撲平といふ無頼者ありけるが先程より茲茶店にて采男付
の動静あるを知りて憤り両刀帯たる侍とも小人も無気なる挙動
こそ意憎けれと傍に見遣して家来が一分不立と義児二三個悉
連来り瀧鼻屋に入て言く罵って茶店も絶方便なれば其の事
采男等も肉取那る処に永居しては場所悪しと要皆表へ立出るを
撲平ハ采男を捕へさんざん悪口雑言を吐ども采男も身に誤あれば
種々詫ぬれど不吹入後るる両三個打寄挙を擧て采男併附を
ちらし部迄を散々に打擲なしければ采男も人前といひ今ハ詮なく

眷頭を以て一個を捕て丟跟ゑば怒て列倭跳掛るを踢倒劊跟
働ども原来柔弱非力の呆男己に危くみへすべれど堪兼て打ば
呆男の善孫抜取先に進し鶻の肩先四五寸切ける這者口惜やと
獏平義児一同に腰釵抜合せ切て掛ゑバ呆男も疾是迄なりと
腰刀抜持切結び目指対手ハ獏平と當一刀に撃て捨れバ逃行義児
呆男行を押跑追詰大袈裟小袈裟ニ斬併此光景ニ
婢女どもあはてふためき逃迷ひところのものハ喧吼ぞと一山大に
噪動し右往左往ニ逃行バ呆男行ハ血刀拭ひ悠く大勢を過
しゝへ此も存らんまハいはれねども卑夫下賤の奴原ニ擒とれ
らんも残念なり一先此場を立退生死ハ一ニ極んと海辺の渡
場看てゆれバ折しも来の汐干浮僥倖ひと汀を延連騒の紛れ
街道坂志してぞ落行ける何人不知喧嘩よと物噪閙まで
彼ノ之助も宿坊を立出妹や如何とこの所へ来るを観るより
侍女婢女ハ走りより後て動静を語るまで破ェ人之助大に怒り
悪児猺等不所存の妹汀髣る噪を惹出し某迠の家名の
瑕瑾遠くハ行めじ追跟て討て捨んと跑出に足手にまとふ
婢女どもも式を踢倒撲倒二個の後をぞ慕ひ行